

金光教の声

平成
23
年7月～9月放送分

NO.396

【もへじ】

《共に生きる》
いのちの大切さ
梶山純子・・・1

《共に生きる》
「おいしい」の声が好きたくて・・・5

《共に生きる》
あなたの声を聞かせて
池川道和・・・9

8月6日・・・13

ラジオドラマ『ようお参りです』

第一回 幹太と雀・・・18

第二回 私だけ、どうして・・・24

第三回 大粒の涙・・・30

第四回 離婚する・・・？・・・35

第五回 子どもを手放す？・・・41

第六回 手のひらの二十二錠の薬・・・46

第七回 言葉はナイフより痛い・・・52

第八回 ありのままの自分・・・57

第九回 ひとりじゃない・・・63

《共に生きる》

「いのちの大切さ」

梶山純子

「おじちゃん、おはよう」

「おはよう。今日も元気でがんばろう！」

今朝も子どもたちの元気のいい声が、通りから聞こえてきます。

私たち夫婦が働くクリニックの前は、小・中学校の通学路となっていて、夫が十年前から、子どもたちとのあいさつ運動を始めました。こうして、毎朝、子どもたちから元気をもらって、私の一日が始まります。

私は、山口県の日本海側に位置する長門市で、

小児科医としていろんな子どもたちを診させて頂いています。

私が、医師になろうと決心したのは、父が産婦人科医として開業していて、赤ちゃんの産声を間近で聞き、患者さんたちと一緒に喜んでる両親の姿をいつも見ていて、私もみんなが幸せになれるお手伝いがしたいと思ったからです。

私は、物心つくころから、母の手に引かれて、金光教の教会へお参りしていましたが、そんな私たちを見て、父はいつも、「苦しい時の神頼みじゃあダメだ！」と言っていました。当時の父は、「自分で努力して自分自身を高めなければいけない」と威張っていました。

こんな時、私は、「金光様にお参りするのは、

『ありがとうございます』と、お礼参りに行きよるんよ！ 苦しい時の神頼みじゃないんよ！」と、反論したものでした。

教会では小学生の私に、「鉛筆にお礼を申してから勉強しなさい」と言われ、鉛筆も、天地のおかげの中で作られていることを教えて下さり、お世話になる全てのものにお礼を申すことを教えて下さいました。

また、私が医学部を目指すことをお話すると、教会の先生は、「天地のおかげの一番の源を勉強してきて下さい」と、おっしゃいました。たとえ、よく効く薬を注射したり、飲んだとしても、血液の流れや、胃や腸で吸収する働きがなければ、薬は効きません。ロボットや人形にどんな高価な注射をしても効かないのです。自分

で治す力や生きていこうとする力がないとダメなのです。また、人間は、薬を作ることは出来ても、人間の体や、体の中の様々な働きを作ることは出来ないのです。

しかし、その当時の私は、教会の先生のお話を何となく、ぼんやりと理解していたに過ぎませんでした。

医学部に入学し、心臓、肺、脳など人間の体の働き、一つひとつの細胞の働きは、人間の力ではどうしようも出来ないということ。医学は、病気が治る手助けをしているに過ぎないのだということに気付かされた時に、生命の神秘の偉大なることに感銘を受けました。

その一つは、生命が誕生する時のことです。女性は一生のうちに約四百個の卵子を排卵し

ます。また、男性は一回の射精の中に、五億個以上の精子を含んでいます。精子が、膣から子宮を通って卵管まで到達する道のりは、人間で

考えると約六キロメートルにも相当し、幾多の関門をくぐり抜けながら泳いでいくことになるのですが、それをクリア出来るのは約百個の精子だけです。こうして卵子の周りに到達した精子は、最後の力を振り絞り、卵子を取り囲む二重の壁を突き破ろうと必死になります。やがて、選ばれたたった一個の精子だけが卵子の壁の中に頭を入れます。この時がまさに受精の瞬間です。

このようにして、出来た受精卵は、世界にたった一つの生命であり、かけがえのないものなのです。

針の先ほどの大きさの受精卵は、細胞分裂を繰り返しながら、子宮に着床し育っていき、一人の人間が誕生するのです。

実際に出産に立ち会った時には、生命の誕生に本当に感激し、神様のお力の素晴らしさに涙があふれ出しました。どんなに科学が進歩しても、人間が人間を造ることは出来ないのです。

また、こんなこともありました。ある日の夜、高熱を出した赤ちゃんを連れて、お母さんとおばあちゃんが診察に来られた時のことです。熱は四十度と高熱ですが、母乳も飲んで、顔色も良く全身状態は良好です。おばあちゃんは、高熱で赤ちゃんの頭がどうにかならないかと、心配しておられました。

そこで私は、「今、赤ちゃんは体の中ではい

菌と一生懸命戦っています。だから、熱が出ているのですよ。熱を出すことでばい菌たちの勢いも弱まるんです。本当に人間の体は、素晴らしいでしょう！ 神様はちゃんと病気と戦えるように体を作って下さっているのです」と、説明しました。

二、三日後、赤ちゃんは熱も下がって元気になり、おばあちゃんも、とっても喜んでおられました。

私は、日々診察に来られた方々に、そして、一人でも多くの子どもたちに、この“いのちの大切さ”を、しっかりお話するようにしています。

そして子育てに悩むお母さんたちには、子どもと共に、一つひとつ自分も親として育つこと、

子どもと一緒に成長していくのだと、お話しします。子育てに悩むのではなく、子どもと一緒に悩み、一緒に育つのだということを。本当に、「子は宝」です。

診察が終わると、患者さんの背中に向かい、必ず、「お大事になさいます」と、声を掛けます。同時に、心の中で、「診察させて頂いてありがとうございます。金光様、金光様、どうぞ患者さんがおかげを頂かれますように」と、お祈りをする毎日です。

これからも、お札の心を忘れない信心をしていきたいと願っています。そして、私の出来る限り、“生命の大切さ”を伝えていきたいと思っています。

《共に生きる》

「『おいしい』の音がききたくて」

金光教放送センター

ナレーション：大阪のある児童養護施設で働く二十三歳の藤井香織さんは、栄養士として、毎日五十人ほどの子どもたちの食事を作っています。二歳から十六歳まで、食べ盛りの子どもが多いので、いつも大忙しです。

藤井：取りあえずお肉を炒める時がすごい大変なんです。夕食の時は、お肉の炒め物でも、四キロのお肉を使うんですよ。それを炒めるってすごい大変な作業で…。

ナレ：児童養護施設は、家族と暮らせない子どもが共同生活をする施設です。親が病気であるとか、虐待を受けたとか、さまざまな事情があります。普段は元気にしても、寂しい気持ちがあるいろいろな形で現れます。藤井さんは調理室から出ると、子どもたちと触れ合うようにしています。

藤井：子どもたちがつらさとか、寂しさを感じる時は、もうすごい甘えてくる時です。小さい子とかは、すごい甘えてきやすい。幼児さんとかになったら、「抱っこー」とか言ってくるし、でもそれが小学生になってきたら、だんだん言われなくなってきた、中学生、高校生になった

ら、もう、絶対抱っこなんて言わんし。でも、小学生は、小学生なりに、構って欲しくて、ちよつと甘えた声出してみたりとか、中学生は話聞いて欲しいから、ちよつと夜遅くまで起きて

みたりとか、話聞いて欲しくて、ほんまにどうでもいい話でも、「今テレビこんなんやつてるで〜」とか、自分に気が向いて欲しい時に、すごい話してきて、甘えてきます。甘えてくる時とか、話聞いて欲しいっていう時は、もう出来るだけ話すようにはしています。

ナレ…子どもたちは寂しさから不安定な気持ちになり、施設内で問題を起こすこともあります。

藤井…子どもらがケンカした時に、暴れても注

意しても、耳に入れない、子どもらが、この先生やったら大丈夫やる。暴れても怒られへんやろみたいな感じのことをした時に、自分の力不足を感じたりします。

ナレ…悩みがあると、藤井さんは神様に祈ります。藤井さんが神様に祈るようになったのは、昨年夏、ある体験をしたからです。岡山にある金光教本部でキャンプがあり、リーダーを務めた藤井さんの班には、元気をなくして落ち込んでいる女子高生がいました。何とか元気になってもらおうと声を掛けるのですが、彼女には響きません。

藤井…どうすることも出来ない自分がすごい嫌

やったし、なんでこんなことになってしまったんやろうみたいな感じで、涙が止まらなくなつて。泣き顔で、もう涙流しながらお広前向かわせてもらつて、お広前に着いたら、どわつ、て

泣いとして。神様にぶつけて、お広前に座らせてもらつて、ぶつけてぶつけて、どうしようつて思つた時に、「あ、お結界に行つたらいいんか…」つてなつて、その時に初めて、自分の中で神様と向き合わせてもらったことがあつたら、金光様は何をおっしゃつたかは自分泣いているから、何も聞こえてないし、分からないけど、そのあと、戻つて夜にその子と話したらすごいすつきりした顔をしてくれて、「あつ、話して良かったとか、あの時お結界行かせてもらつて良かった」つていう…、この子がおつたか

ら自分も神様と向き合うチャンスを取けたんやなつていうことがあつて、「あつ、ていうことは、神様は私の中におつたんや」つていう認識が出来て、すごいうれしくなつて。

ナレ：金光教本部にはお広前といつて祈りを捧げる場所があります。その一角には“お結界”という所があり、金光教の教主である金光様がいつもおられ、お参りになつた人の話を聞いて下さいます。藤井さんは心の中にある思いを全部打ち明けました。すると金光様は藤井さんの言葉をじつと受けとめ、祈つてくれました。大きな安心に包まれた藤井さんは、もう一度彼女の所に行き、話をしようと思ひ立ちました。

藤井：何やる、その時からかもしれないけど、神様は常におってくれてるって、そばにおってくれてるっていうふうに思うことが出来るようになったから、職場でも、子どもが言うこと聞いてくれへんかったりとかしたら、唱えられるようになったんやなと思います。

ナレ：この経験から、藤井さんは職場でも心の中で神様に祈るようになったそうです。

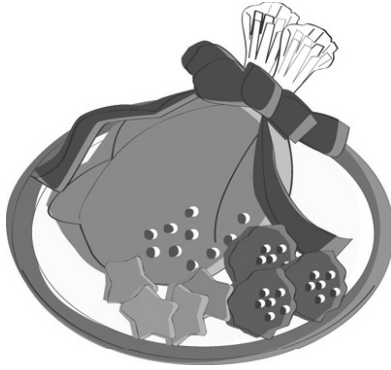
藤井：神様は何でも話せる存在ですね。子どもたちに願っていることは、いっぱいご飯食べて風邪引かないようにとか、丈夫な体に育ってくれればいいなというふうに願ってます。精神的な面では、自分で気持ちのコントロールが出来

るようになって欲しいなって。暴れ出したら、もうどこにその気持ちを持っていったらいいか分からん子とか結構おるんで、その気持ちの持っていき方とかを年々ちよつとずつ考えていってもらっていけたらなっていうふうに、そういうふうにサポートするのって難しいから、願うことしか出来へんけど、そうやっていってくれたらなって思いますね。

ナレ：藤井さんは、今日も子どもたちが喜んでくれるように、祈りを込めて、ご飯を作ります。今の課題は新しいメニューを増やすことだそうです。

藤井：やっぱり新しいメニューが出てきたら、

これ見たことないって言うんですよ。テンションがバツと上がるんですよね。そういう顔を見るのが楽しいからメニュー増やせたらいいなって思います。



《共に生きる》

「あなたの声を聞かせて」

金光教伊予三芳教会 池川道和

私は現在、自殺予防の電話相談のボランティアをしています。

相談者のほとんどは、周囲に悩みを打ち明ける相手がいなくて、独りで悩みを抱えています。一生懸命考えているつもりでも、同じ考えが堂々巡りをしています。

人は独りで考えていると、とてもつらく深く落ち込みます。もう自分はいない方が楽だとも思えてくるようです。電話相談はそんな人のために、ボランティア相談員が待機しています。

自分の考えや思いを誰にも伝えることがなかったら、「自分なんか要らない人間だ」「そんな苦しい日々を生きていくよりも、死んだ方が楽」と思ってしまうようです。もし、このラジオをお聞きのあなたが同じような思いでいるなら、電話でお話をしてみて下さい。お話をする中で、きっと何かが見えてくると思います。

電話相談は“助けてあげる”というのではなく、相談者自身の中にある心の力がよみがえり、少しでも気持ちが明るく、楽になって欲しい、と願っています。そして問題があるとしたら、それを解決する方法も自ら考えられるように、と毎日活動をしています。

ある日、机に向かうと電話のベルが鳴りました。五十代ぐらいの女性でしょうか。「聞いて

もらっていいですか」と話し始めました。声が小さく元気がない様子です。出来るだけしっかりと聞こうと受話器を耳に押しあてて、受話器の向こうの声に耳を傾けます。「体はボロボロで老人のようだし…、気持ちは子どものように不安定で何に対しても自信がない」と話します。

「うつ病と診断されてからしばらく経ちますが、良くなる気配もなく、今では寝込むことも多い。夫は自分の病気に対して全く理解がなく、『何を怠けているのか…、毎日の家事がそんなに大変とは思えない』と言われている。子どもたちはそれぞれに自立していき、話し相手にはなれず、とても孤独感が強い」とのことです。

私は、「本当に寂しく、つらい思いをしていらっしゃるのですね」と声を掛けると、「そう

なんです。分かってもらえますか」と、少し元気が出てきたようです。つらい気持ちはこちらに伝わったと感じて安心したのか、不安に思っていることを徐々に話し始めました。

小さいころ、母が厳しく、何をしても叱られ、全く自信が持てなかった。結婚しても今度は夫が厳しく、常に夫の顔色を見て過ごしてきた。

そのため子育てにも自信が持てなかったと。「自信がない」という言葉が何度も出てきます。私は、「それでも、あなたは生活に、子育てに一生懸命頑張ってきたのですね。子どもたちもそれぞれに自立して、巣立っていったのですね」と話すと、「そうなんですよ…」と答え、安心した声が聞けました。

一時間近く話を聞き、「また私の愚痴を聞いて

て下さいね」と言われ、話を終えたのでした。つらい気持ちを話すことにより、初めの元気がない声からは徐々に落ち着いてきた様子が感じられました。

「あなたとお話が出来て良かった」「誰にも話せないこんな話を聞いてくれてありがとう」と言われると、「私もあなたとお話が出来て良かったです。ありがとう」と返しています。「電話をしてくれてありがとう」という気持ちをさえ生まれます。

「ありがとう」という感謝の言葉を聞くたびに、多少なりとも誰かの役に立ったと感じます。そんな時はボランティアをやって良かったと思います。

またある女性からは、「生きているのが苦しい、死にたい」との電話がありました。親の期待に応えたいが出来ない自分を責め続けているとのことでした。「生きているだけで充分ではないですか？」と、私は言葉を返していました。

「えっ、生きているだけで充分なんですか？それなら出来るかもしれません」との返事です。

中には、怒りながら話し続ける人、また、こちらの何気ない言葉に怒り出す人もいます。

でも、気持ちをぶつけるところが他になく、ここにしかないのでしょうか。掛かりにくい電話を何度も掛けて、やっとの思いで繋がりに、そしてその怒りが、電話を掛けてきた人の重い苦しみとして伝わってきます。

人間は生きる力を持っています。それは、神

様が生かそう生かそうと働きかけているように思うのです。

人が悩み苦しむということは、何とか自分を支え、より良く生きようと努力している過程でもあります。その気持ちや心に寄り添うということは、相手の苦労をねぎらい、エールを贈ることでもあります。

一本の電話を通して、顔は見えないけれどその人を大切に思い、「大丈夫ですよ」と、その人の中にある生きる力を信じ、生かそうとする働きに手を合わせながら、一生懸命聴かせて頂いています。何も言わない無言電話にも、その後にあるさまざまな声にならない叫びを大切に受け止めたいと思います。人の苦しみや深さは他人には測れません。でも、寄り添うことは出

来ます。

「8月6日」

金光教放送センター

あなたも充分生きていく意味があります。生きていく価値があります。生まれた意味はあるのだと励まします。生きる意味が分からなくても、本当に好きでない仕事をしていても、生きていていいんだ。と思って欲しいのです。

悩む人の心の中に、明るい希望の兆しが現れることを信じて、これからも一人でも多くの方々の気持ちに寄り添っていきたいと願っています。

ナレーション：広島県にお住まいの福田喜代子さんは、現在八十二歳。今から六十六年前の昭和二十年八月六日、爆心地から北へ約一・五キロメートル程のところにある、生まれ育った金光教横川教会にいました。福田さんは当時十五歳、空を見上げると原爆投下直前のB29が目に見え込んできました。

福田：父の介護をしながら、掃除しようと思うたら、父がね、「今、警戒警報が解除になったけど、どうも日本の飛行機の音じゃない」って言

うんですよ。それで私はね、掃除をする前に障子を開けまして、見たんですよ。そしたらね、西から東へ飛行機が飛ぶのは見たんです。それでまあそれを閉めました。まあ戸を閉めて、掃除をしよう思うてかがんだところにピカーッと光ったんですね。そこから放射能というか、ピカッと光って、両手両足をやられたんですね。まあとにかく、「これはおかしいなあ。下へ何かの上いっばい乗っとるし」思ったら、やつぱり家の梁はりが足のところへ掛かってたんですね。

ナレ：倒壊した家の下敷きになり、身動きがとれなくなった福田さんに、燃えさかる炎が近づいてきました。

福田：「お父さん、お父さん。助けてえ」って言うたら、父もおそらく下敷きになっとったんでしようけど、体の弱い父が先に出たんですよ。はい出たんですね。それで声を聞いて助けに来てくれたんですよ。私の体の上に木とか瓦とかいっばい落ちてますからねえ。出られんですよ、私。ほんで、父は一生懸命瓦を投げ投げね、もう周囲はずっと燃えてるから。父は「出てくれえ。わしはお前を置いてよう逃げん」言うて言うんですよ。ほいじゃがこの左の足にどうしてもこの大きな梁が抜けない。まあ、とにかくここにいて一緒に死んだんじやいけんと思うから、私は、「逃げてくれ。逃げてくれ」言うたんですよ。「ああ、もうこれで覚悟を決めよう」思うて、思うとつたら父が、「もげて

もいいけん。足引つ張つてみてくれ。お前を置いといてよう行かん」。周囲は燃えてきよるんも分かるんですけど、その中で父がそう言いながら、「金光様、金光様」言うて、もうお願いしよりました。そしたらねえ、スツと抜けたんですよ。

ナレ：左足を負傷した十五歳の少女は、片腕に病気のお父さん、もう片方の腕にお父さんを休ませるための布団を抱え、炎の中をとにかく逃げました。

福田：もう家が全部倒壊してるから、それであつちこつち燃えているんですよ。ですからその間をくぐって逃げるといことが精いっぱい

したね。その中には、亡くなって倒れとる人もおるし、川の方へ逃げていきよる人の方が多かつて、牛とか、馬とか、あーゆーなのももうたくさん死んでおりましたね。でもね、父を助けたい一心でしたから、片手に持つて、布団を持つて歩いていくんですが、ところどころ屋根の下へ、そのお布団敷かせてもらつて、父を寝させて、それからちよつと気分が治まると、はあ、もう、父が、またどつか、もうちよつと向こう行こうて言うて。ずっと歩いて行つたんですよ。私はもう父が亡くなつたら、もう独りぼつちという思いがね、強かつたです。父をここで亡くしたらどうしようかという思いじゃから、とにかく父を助けな、つていう思いは強かつたです。

ナレ：日暮れ頃には、爆心地からずいぶん離れた避難所に何とか必死で逃げ延びた福田さん親子でしたが、翌年、病気が悪化したお父さんは亡くなりました。

戦争が終わり、六十六年たった今でも、この時の体験を話す福田さんの目には涙が浮かびます。

福田：最終的に泣いたり苦しんだりするのは、市民であり子どもであるんですからね。だからもう、こういうことはもう：もう私らのような経験をするには、もう次の代の子にはさせたくないですよ。でもねえ、とにかく一時ひとときはね、原爆の話するの、ものっすご嫌じゃったんです

よ。思い出したくないという思いで。「いやいや、もう私思い出しただけで涙が出るけえ、人の前で話することをようせん」って言うてね。

ナレ：あまりにも悲惨な原爆の体験は、その後何十年たつても人には話せずにいた福田さんでした。しかし、今から七年前、福田さんの気持ちに変化が表れました。

福田：孫が原爆の資料館へ修学旅行へ来たりした時にね、「はあ、これはやつぱりうちの子どもにも孫にもね、知らしとかにやいけん」いう思いがだんだん強くなったの。いつもね、「おばあちゃん、原爆の話したら、また泣き出す」いうて、いつも孫にも言われるんですけど。原

爆の恐ろしさいうのを少しでも分かってもらったらねえ、いいんじゃないか。まあ孫を通じて感じましたので、戦争を知らない今の子どもたちにも、少しでも知ってもらえば平和になるんじゃないかと思うんですね。資料館行って、六年生ぐらいの子どもいうたら、やっぱり恐ろがりますからねえ。：戦争はいけません。

ナレ：ご自身のつらい体験を、人に語っていくことを決意した福田さん。今日この放送の収録に出かける時、お孫さんが、「おばあちゃん、今から原爆の話、しに行くん？」「ごころうさん」と声を掛けてくれたそうです。

福田さんの平和への祈りは、お孫さんの心にもしっかりと届いているのでしよう。



《ラジオドラマ》

『ようお参りです』

脚本 柴田壽子

第一回 「幹太^{かんた}と雀」

*登場人物

教会の先生（三十歳・男性）

幹太（小学生）

たみ（六十歳・女性）

男の子 1・2

女の子 1・2

（朝、雀パイパイ。ほうきで道を掃いている）

たみ 先生、おはようございます。

先生 ああ、おはようございます。たみさん、今日もようお参りですね。

幹太 着物のおっちゃん、おはよう。

先生 やあ、幹太君おはよう。

たみ 何やの、先生におっちゃんやなんて。

幹太 せんせて、何のせんせ？

たみ ここの教会のや。

幹太 教会て？ 何の教会？

たみ 金光教や。

幹太 こんこう…？ へー、そんなん知らんわ。
なあおっちゃん。

先生 何や？

幹太 ここの庭広いし、学校終わったらキャッ

チボールしてもええか？

先生 はは、ええよ。

幹太 えへへ。

たみ 幹太、はよ学校に行かんと遅れるよー。

幹太 はーい。八百屋のおばあちゃんほうるさ

いなあ。行ってきまーす。

(幹太、駆け出す)

先生 可愛い子ですな。

たみ 先生お若いのに、オツチャンやなんて言うて。

先生 ははは、小学生から見たら、三十の僕なんか十分にオツチャンですよ。

たみ こんな寂しい不便な所に先生に来て頂い

て、有り難いことですわ。

先生 ここは空気はええし、水もおいしいし、

自然がいつぱいでええとこですわ。自転

車で二十分も走ったらスーパーがありま

すからな。そうや、子どもらに何か買う

て来ますわ。

たみ まあまあ。

(キヤッチボールをしている)

男の子1 いくで。

幹太 よっしゃ。

男の子1 もういっちょ。

幹太 おい、どこ向いて投げてるんや、ちゃん

と放れ。

男の子 1 投げてやるやないか。お前がちゃんと

受けんのや。

男の子 2 もうー、下手くそやなあ、はよ代わ

ろうや。

女の子 1 ほな、鬼ごっこしよう。ジャンケン

ポン！

女の子 2 わーい、キミちゃんが鬼や。

(他の子の喚声)

女の子 1 一、二、三、四、五…。

(ガラガラ、戸が開いて)

たみ まあまあ、えらいにぎやかなことですか

あ。(間) あ、先生何してはりますの？

先生 ここに来られるお子さんたちの名前を書

いて、病気やけがをせんように、お祈り

するんです。

たみ ほな、私も一緒にお祈りさせてもらいま

すわ。

(少しの間)

女の子 2 危ない!!

男の子 1 おっちゃーん!!

先生 どないしたんや!

男の子 2 ボールが塀の向こうに行っても

て、幹太が塀をよじ登ったんやけど、塀

高いし、下りられんようになって…。

女の子 2 下に大きな石あるし、落ちたらけが

する!

先生 幹太、大丈夫か！（間）幹太、手え放し

子どもたち わあー。

たらあかんど。ほんでな、おっちゃん

肩に足を載せるんや。そやそやそやそや、

（紙袋を開けるなどの音）

それから肩車や。そーっと、そーっとや
で。

子どもたち いただきまーす。

男の子1 おっちゃんこけたら危ない。僕らで

支えよな。

（食べている雰囲気。おせんべいバリッ！）

男の子2 うん。

女の子1・2 うちらも。

幹太 あ！ 歯抜けた、どないしよう……。

先生 よっしゃ。もう降りても大丈夫や。

先生 おお、そうか……。そやなあ、今までお世

幹太 フーッ、おっちゃん、あ、先生ありがと

話になった歯にお礼を言うて、人が踏ま

う。

ん木の下に埋めたらどうや？

女の子1 もうー、ひやひやしたわ。

幹太 うん、僕、神様のところでお礼言うて、庭

先生 ははは。みんな、中に入ってお菓子食べ

に埋めてくるわ。

へんか？

(鳥の鳴き声など、のどかな雰囲気)

たみ こんにちは。まあ、ぎょうさんの野菜で

すなあ。

先生 はは、これ、幹太君のお母さんから、お

礼や言うて頂きました。

幹太 (飛び込んで来る) 先生!

たみ また、あんたか。

先生 どないしたんや?

幹太 この網の中に雀が…。

たみ あんた、魚取りの網で雀取ったんか?

幹太 違うねん、振り回して歩いてたら雀が入

ってしめて、どうしても逃げへんのや。

逃がすの手伝うて。

(雀の鳴く声。羽ばたく音)

幹太 可哀想に鳴いてるやろ。死んでもたら

どないしよう。

先生 よし、幹太君、網の入り口しっかり開け

て。

幹太 うん。

先生 たみさんもこっち引っ張って下さいな。

たみ ええ。ああ、あかんて。もつれてしまう。

難儀やなー。

幹太 ああ、羽が網に絡まってしもた!

先生 幹太君、はさみで網の糸を切ろう。

幹太 あかん! これ友達に借りた網やから切

ったらあかん!

たみ そんなこと言うたかて。

幹太 僕、神様をお願いしてくるから。

たみ へえー！ 幹太が…？

先生 ああ、網が絡まって、余計になつちもさ

つちも行かんようになったわ。

たみ ああ、可哀想に。雀、もがいてますなあ、

あ痛っ！

先生 え？

たみ くちばしで突かれました。

先生 幹太君、やつぱりはさみで網を切ろう。

羽が取れたら可哀想や、ええやろ。はさ

み取ってくるさかいな。

幹太 (困った…) ええー…うーん…。

たみ それが一番や、雀も可哀想や。

幹太 あれー。

たみ どないした？

幹太 いじつてたらはずれた。僕の手の上見て。

先生 幹太君、はさみ持ってきた…。お、雀、

出たんか？

幹太 うん、何やするつとはずれた。可愛いや

ろ。お前、ちゃんと飛べるか？

(窓を開ける音)

幹太 ほーら、飛んでおかえりー。

(雀 チイチイ)

(やや・間)

先生 良かったなあ。

たみ ほんまに。

先生 幹太君の真心が、雀を助けたようなもん

や。

幹太 えへへ、おーい雀、元気だなー！

第二回 「私だけ、どうして…」

*登場人物

美恵子（四十代）

さゆり（美恵子の友人）

教会の先生（七十歳・男性）

（喫茶店）

さゆり どうしたの美恵子、このケーキおい

しいのよ。食べないの？

美恵子 うん。

さゆり もう、久しぶりに会ったのに、さつき



から「うん」「うん」ばかりで。顔

美恵子

ここだわ、さゆりの言つてた教会。あ、

色悪いし、体どこか悪いの？

掲示板がある。

美恵子 べつに…。

(読む) 『あなたは一人で悩んでいま

さゆり じゃあ、何か心配事？

せんか。一人で重い荷物を背負ってい

美恵子 …。

ると倒れてしまいますよ。お話を聞か

さゆり 何か悩んでるんだったら、私の行つて

せて下さい』

る教会の先生に相談してみたらずと

どうしよう…。

っても優しいおじいさんの先生よ。

美恵子 教会って宗教でしょ。宗教って何だか

先生

よく来られましたね。お話を伺いまし

怪しげだし、嫌だわ。

ようか。

さゆり もうっ！ 失礼ね！ 心配してあげて

美恵子

あの一。

るのに。私、帰る！

先生

は？

美恵子

話を聞いていただくのに、お礼という

(街のノイズ)

か、お金…なんかは…。

先生

はは、結構ですよ。

美恵子 ……実は、……夫のことなんです。

先生 はい。

美恵子 こんなことを言うのはお恥ずかしいん

ですが…。

先生 私がここでお聞きすることは、誰にも

話しません。ご安心下さい。

美恵子 ……夫が……アルコール依存症で…。

先生 はい。

美恵子 こんなこと言うの变ですが、夫は一流

企業の社員で。でも、度々お酒が原因

で失敗して。会社を遅刻して、私がそ

れをかばったり。酔っ払って車で眠り

込んで駅員さんから連絡を受けたり。

先生 ええ。

美恵子 アルコール依存症の診断は下されてい

るんです。今までも専門の病院に入院

を繰り返していました。退院する度に

「もう酒は止める」って宣言するんで

すが。

先生 その繰り返し…？

美恵子 はい。会社もそのことを知っているの

で、責任のある仕事を夫には与えない

し、それが不満で夫はまた腹を立てて

お酒を飲むんです。

先生 なるほど。

美恵子 で、夫は家の中でもお酒を隠すんです。

私がそれを探して捨てる。たんすの中

にあったり、本棚の後ろに隠してあつ

たり、もういたちごっこ…。

先生 ほう…。

美恵子

日曜日に夫がちよつと出掛けるって言うんで、私も一緒にについて行つたんです。本屋さんに入ったので、安心して私も本を見てみると、いつの間にか夫が消えている。探し回ると、コンビニの前でお酒を飲んでるんです。私：もう情けなくて、情けなくて。疲れてしまいました。（吐息）

（やや・間）

美恵子

あつ、済みません。長々とグチを申しまして。多分、先生は、「そんなことを言つてはいけない」っておっしゃるんでしょね。

先生

いいえ。あなたはこれまでとてもご苦労をなさった。誰にも相談せず一人

美恵子

で抱え込んでこられたんですから、グチを言いたくなるのは当たり前です。

先生

：ありがとうございます。聞いて頂いて、気持ち少し楽になりました。では、いろいろ伺いましたから、これからあなたとご主人のことを神様にお願いさせて頂きます。

美恵子

先生はくりりと祭壇の方を向き、長い間、神様をお願いしてから私の方を向いて。

先生

どうぞご安心下さい。もうご主人のことは神様が責任を持って下さいますからね。あなたが責任を持たなくていい

んですよ。ご主人がお酒を飲んでも放
つておいて下さい。あなたはこれまで
いろんなことを我慢された。もう自由
になさっていいんですよ。

美恵子 えっ、本当ですか？

先生 はい。

(救急車のサイレン。電話のベル)

先生 あ、もしもし。

美恵子 (電話の向こう) 先生！ 夫が酔っ払
って道で倒れて、頭を強く打って血を
流して、病院に運ばれました。

先生 それはご心配ですね。無事に回復され
ますように、お祈りします。

美恵子 それからひと月程して、私は教会に行
った。

先生 その後いかがですか？

美恵子 この前先生がおっしゃったこと、私、

信じてみようと思つて、夫がお酒を飲
んでも黙つて放つておいたんです。す
ると、お酒の量がどんどん増えて…。
先生 はい。

美恵子 でも、先生がお願いして下さいると
思うと不思議に心が落ち着いて。それ
で、あのけがも思ったより軽くて退院
したんですが、夫が急に改まつて、「話
がある」つて。そして、「これまで迷

惑を掛けたけど、もう酒は一口も飲まないように頑張ってみる」って言ったんです。

美恵子 (元気に) はい。

先生 良かったですねー。神様が助けて下さいましたね。

美恵子 はい。友達も旅行に誘ってくれるようになって。今までは、夫のことが心配で行けなかったんです。

先生 ゆっくりと楽しんでいらっしやい。

美恵子 私、信心って何か堅苦しいことだと思っていましたけど、そんなことはないんですね。

先生 はい、そうですね。神様と一緒に、安心して楽しく生きて行くのが信心なんですよ。



第三回 「大粒の涙」

*登場人物

さやか (高校三年)

母 (さやかの母)

先生 (三十代女性・教会の先生)

男1 (二十代)

男2 (二十代)

(電話のベル、出て)

さやか はい、そうです。…え！ 鈴木先生が

…！ はい…はい、あさつてですね。

…え？ 金光教の…？ はい、失礼します。

(電話切つて)

母 さやか、どうしたの？ 何かあった

の？

さやか 副担任の鈴木先生が亡くなったって。

母 ええ！ だってまだ二十代でしょ。

さやか 急に亡くなったって、お葬式はあさつ

てで、金光教のお葬式だって…。

母 お若いのに、お気の毒に…。

さやか 大好きだった鈴木先生が亡くなった

…！ 私は真つ暗な深い穴の中に突き

落とされた。私は…高校を卒業したら、後半年したら、卒業式の日に告白しようと思っていたのだ…。ざーっと片思いだったけど、学校に行けば先生に会えるのが唯一の楽しみだった。先生の笑顔、もう会えない…！

(鳥のさえずり)

母 さやか、早く起きないと学校遅れるわよ。

さやか 頭、痛い…。

母 昨日もでしょ。学校行ったり休んだり、一度ちゃんと医者さんに行きなさいよ。

さやか 先生のいない学校なんか行きたくない。寂しいだけだ…。母がパートに出

掛ける玄関のドアの閉まる音を聞いて、のろのろとベッドから起き上がり、パソコンを立ち上げる。

(パソコンを開く音、キーを叩く)

さやか 意味もなくインターネットをしている

うちに、出会い系サイトにアクセスしていた。

男1 毎日一人で寂しいです。仲良くなって、

ご飯とか食べながら、お互いの悩みとかそんな会話の出来る方。

なった。心の隙間を埋めてくれる人なら誰でもよかった。

さやか

私はその人と会った。寂しいと言ったその人は楽しそうで、私の話なんて何も聞いてくれなかった。ただ、ご飯を食べてカラオケに行った。

(パソコンを開く音、マウスをクリックする音)

さやか

また、インターネットをしていた時だ。

男2

楽しい時間を過ごしましょう。楽しい関係になりましょう。

あれ？ 金光教のホームページ？ そう

言えば、鈴木先生のお葬式も金光教だった。

さやか

お金なんていらない！

(読む)「教会では、いつでもどんな悩みでもお聞きしています」

さやか

私は悪いと知りながら、いろんな男の人と付き合った。パーツと遊ぶように

さやか

好奇心で行った教会に着いてびっくりした。若い女の先生だったのだ。

先生 よくいらつしやいましたね。

さやか あの、ここは誰が来てもいいんです

か？

先生 はい。

さやか 私、誰かと話したかったです。

先生 そう。ここは誰にも言えないどんなこ

とでも、神様が聞いて下さる所なの。

だから、何をお話してもいいのよ。

さやか 見ず知らずの私なんかの話も？

先生 あなたは何かつらいことを抱えていら

つしやったんでしよう。ここではいい

話をしようなんて思わなくていいの。

人間は、一人で重い荷物を抱えていた

ら、潰れてしまうでしょ。

さやか 私は初めて会った先生にいろんなこと

を話し始めていた。男の人と付き合っ

たこと。学校に行っていない、生きて

いる意味が分からない、など。すると

先生は目をつぶって、静かに祈って下

さった。

さやか それから時々この教会に来るようにな

った。先生は本当のお姉さんのように

優しく接してくれた。ある雨の日だっ

た。

(雨音)

さやか 先生、私が好きだった学校の先生が先

月亡くなつたんです。

さやか 美術？ 鈴木先生だ。そうだ、鈴木先

さやか いつもは静かに返事をしてくれる先生

が黙っている。顔を見ると、目から大

粒の涙が頬を伝っていた。

(雨音)

さやか 先生、どうしたの？

さやか 私は走った。あの物静かな人が鈴木先

先生 …。

生の婚約者…？ 鈴木先生が死んで、

さやか 先生！

どんなに悲しいだろう。私の…私の…

先生 私も…先月婚約者を亡くしたの。

に、今まで私の話を一生懸命聞いてく

さやか えっ！

れた…。私は空を仰いだ。雨が顔に打

先生 高校の先生をしていたの。美術を教え

ちつける。強い雨の勢いと共に、色ん

てた。

な思いが体から抜け出た気がした。

第四回 「離婚する…？」

(雨音消えて)

(学校のチャイム)

*登場人物

洋子 (五十歳)

あけみ (二十五歳・洋子の娘)

茂 (五十二歳・洋子の夫)

教会の先生 (六十歳・男性)

生徒 さやか、おはよう。

さやか おはよう。

さやか いつも私のために祈ってくれた教会の

先生に、学校に行けるようになったと

報告しよう。

きつと笑顔で迎えてくれるだろう。

(ボタン！ 玄関ドア閉まって)

あけみ ただいま、お母さんお母さん！

洋子 どうしたの？ 騒々しい…。

あけみ お父さんは？

洋子 会社。

あけみ 日曜なのに？

洋子 ここのところ忙しいんだって。だから、土日も出勤。

あけみ うそ！

洋子 え？

あけみ 違う！

洋子 何言ってるの？

あけみ ラーメン屋。

洋子 ラーメン屋って？

あけみ 週刊誌で見た行列の出来るラーメン屋に、友達と今日行ったの。そうしたらお父さんが働いてるところを偶然見たの。

洋子 ハハ：（笑う）もう、そんなわけない

でしょう。

あけみ 実の親よ！ 見間違えるわけないわ

よ！ 前は土日は家にいたわ。

洋子 だって、背広にネクタイしめて出掛け

てるのよ。

あけみ お父さん！

茂 何だ？

あけみ 今日、お父さんをラーメン屋で見た！

茂 え!?

洋子 あけみって変なこと言うの。フフ：。

あけみ 否定しないの？

（やや間）

茂 ああ。

洋子 そうなの？ どうして!?

り…。

茂 (重苦しく)…会社…リストラされた。

あけみ お母さん、私、この家を出る。

洋子 えーっ！ いつ？

洋子 あけみ！ 何を言うの？

茂 三カ月前。

あけみ こんな家いられない、もう決めたの。

洋子 どうして早く言ってくれなかったの？

私、一人暮らしする。

(やや間)

洋子 都合が悪くなると黙っちゃうのね。再

…私…ラーメン屋に行かなきゃよかった。お母さんに言わなきゃよかった。

就職先がラーメン屋ってどういうこと？

後悔してる。

洋子 開き直ったのか、夫は次の日から普段

洋子 この家は積み木を崩したようにガラガラ

着で出掛けるようになった。何の説明

と壊れていく。私の頭の中には“離婚”の二文字がちらつく…。パートを探して

もなく、私とのけんかの日々が続くよ

働きました。

うになり、家の中は氷のように冷え切

(自転車のベルなど、町の様子)

洋子 パートの帰りに金光教の教会の前を通

る。表に掲示板が出ている。いつも横目で通っていたのだが、ふとその文字に目が行った。

『夫婦は他人の寄り合いです』

「本当にそうだ!」。ついふらふらと教会の中に入った。

先生 どうかなさいましたか?

洋子 あ、あの、表の掲示板上に。

先生 はあはあ。

洋子 『夫婦は他人の寄り合いです』って。本

当にそうだと思います。私あれを見て、

離婚の決心が固まりました。夫は自分の

ことは何も私に話しませんし、詳しく聞き出そうとすると、怒るか、黙ってしま
うか、どっちかです。もう一緒に生活していくことなんて出来ません!

先生 では：あなたの心が納得して離婚出来る

ように、神様にお願ひしてみますか?

洋子 心が納得って：：?

先生 人にはそれぞれ、いろいろな生き方があ

りますからね、離婚もあなたの生き方です。んー：。ではご主人を責める前に、あなたの良いところを見つけ出して見ませんか?

洋子 そうすれば、納得して離婚出来るのです

か?

先生 はい。一週間後、あなたの良いところを

探して、またここに来て下さい。

洋子 一週間ずっと、私は、「自分の良いところ

ろ、良いところ……」と考えながら過ごした。

先生 どうでしたか、良いところはたくさんあり

りましたか？

洋子 いいえ、一つもありませんでした。かえ

って嫌な面ばかり浮かんできました。夫

を責めてけんかばかりして、そんな家が

嫌で娘は出て行ってしまいました。全部

私のせいです。夫はリストラに遭って、

家族に心配を掛けたくなくて言い出せな

かったのだと思います。(涙声) 夫の方
が、私の百倍も苦しんだ……。

先生 そんなに自分を責めなくていいのです

よ。ご主人のことを思いやる、それはあ
なたの心の中に神様がいる証なのです。

……ところで、表の掲示板、最後まで読ん
でここに来られたのですか？

洋子 いいえ……。

先生 ハハ……、ではご一緒に。

(外に出る。交通音)

洋子 (読む) 『夫婦は他人の寄り合いです。

けんかをして、後から仲直りをする、

どうして仲直り出来たのかと不思議に思

いませんか？ それは天地の神様より授

かった心があるからですよ』

あつ、私慌て者で…。

洋子 顔が真っ赤になった。

先生 (笑いながら) いやいや。

洋子 また、お伺いしてもいいですか？

先生 ええ。いつでも、どうぞ。

洋子 その一年後、夫は小さなラーメン屋を開店した。開店の日、教会の先生も来て下さった。

(ラーメン屋の雰囲気)

あけみ いらっしやいませー。はい、みそラー

メン二つですね。

洋子 毎度有難うございます。ご注文は、は

い、バターラーメンに…。

あけみ お父さん、頑張って行列の出来るお店

にしようね。私、ホームページ作るよ！

茂 おう、頼むよ。



第五回 「子どもを手放す？」

*登場人物

栄子

高志（栄子の夫）

春香（中学生・長女）

雄太（小学生・長男）

父（栄子の父・教会の先生）

栄子 えっ！ 四十万もかかるのん？

高志 そうや、車の車検に四十万や。

栄子 そんなお金あんの？

高志 あらへんから困ってるんやがな。

栄子 見え張って、あんな八人乗りの大きな車

なんか買うからや。

高志 そんなこと言うたかて、お前かて友達

子どもら乗せて、河原にバーベキューに

行ってたやないか。

栄子 あんたかて、友達引き連れて海釣りに行

ったりして。

高志 そら、お前：止めよ、そんなこと今さら

言うてもしょうがない。たしかにあの車

買った時、俺には分不相応かもしれんと

思ったことはあるんや。

栄子 困ったねえ…。バスの数も少ない、こん

な不便なとこで…。雄太や春香の部活の

送り迎えもあるしなあ…。

高志 （ため息）

栄子 ねえ、あの車売って、小さな車買うのは

どう？

高志 無理無理、もう長いこと乗ってるから、

安うにしか売れへん。

栄子 そうや！ 実家のお父さんに頼んでみ

る？

高志 えー！ 親に頼るなんか、そんなん悪い

わ。それにお父さんの教会、お前最近全

然お参りにも行ってへんやないか。

栄子 (困って) ははは、そうなんよ、ちよつ

と敷居が高いけど…。

栄子 私の実家は金光教の教会、父は教会の先

生をしている。私は久しぶりに実家の門

をくぐった。

父 おう栄子やないか、珍しいな。皆元気か？

栄子 うん、来よう来ようと思いながら、子ど

もに振り回されて忙しゅうて、なかなか

来られへんでごめんね。これ、お父さん

の好きな酒まんじゅう。

父 ははは、ありがとう。

栄子 ふふふふ…なんで私の顔じろじろ見る

ん？

父 いや、べつに。まあ、大体の察しはつい

てるけど。ハハ…。

栄子 ははは、いや実はね、家の車がね…。

高志 お父さん、何て言わはった？

栄子 それがね。

父の声

そうか、そら困ったことやなあ。そんなに車を手放せへんなら、誰か子どもを手放すか？

栄子

それ聞いて、笑ろてしもた。子どもを手放すことを考えたたら、車ぐらい何でもないなあ思た。

高志

んー：そやな、そうしよう。何やすつきりしたな。

栄子

うん。

高志

そういうわけで、もうこれから車は無い。

雄太

えー、もう車に乗られへんの…？

高志

そうや。

春香

あの車無くなるの、寂しいなあ。

雄太

うーん、僕の家は貧乏なん？

栄子

えっ：（考えて）：いや、あのね、人をいじめたり、意地悪をする人のことを貧乏って言うの。

高志

そう。

雄太

ふーん、ほな僕は貧乏やないわ。

高志

ハハ：。それで、これからは自転車や。

雄太

ははは、新しいの買ってくれるんや。

春香

私は古いのでええよ。もったいないし。

高志

自転車はな、体にええぞー。お母さんなんかダイエットになる。

栄子

はい：何言うてるん。自分の三段腹よう

見てから言うてや。

高志

ははは。

春香 エコやね。

雄太 何やそれ。

春香 エコロジーや、地球に優しいんや。

雄太 ふーん。

栄子 心配していたほどのことはなかった。皆

それぞれの新しい環境の中で楽しんでいた。私も風を切って走り、季節をじかに感じていた。

栄子 お父さん、春香がまだ帰って来えへんの

やけど。

高志 部活やろ、もうじきバレーの大会がある

て言うてたから。

栄子 それにしても遅すぎる。何かあったん違

うやろか。交通事故に遭うたとか、自転

車古いしパンクして困ってるとか。ちよ

っと探してくるわ。

高志 ほな、俺も行くわ。雄太、留守番頼むで。

雄太 はーい。

栄子 春香ー、はるかー。

高志 春香ー、おらんかー。

栄子 春香ちゃん。

春香 お母さん（近付いて）どないしたん？

栄子 春香！ あー良かった。どないしたんで、

こっちが聞きたいわ。

春香 （笑う）遅うなってごめん。あんな、帰

り道でえらい荷物持って、よたよた歩い

てはるおばあさんに会うてな。荷物自転

車に乗せましょか、言うて、おばあさんの家まで送って行ったんや。

(鳥ピイピイ)

栄子 ああ、そう。

高志 今日はサイクリング日和や、ほな行くで

春香 そしたらおばあさんが家にながって

春香 皆で行ったらおじいちゃん喜ばはるやろ

って、一人暮らしで話し相手があらへんし寂しいんやて。ほんで、お茶とお菓子ご馳走してもらた。そんで、お土産に庭の畑のトマト。

雄太 うん！ 多分、びっくりするよ。

栄子 まあまあ。もう、遅いし、心配してたん

高志 あれ、お父さんの教会の掲示板に。

よ。

父の声 『貧乏をして得られるものがある。病

春香 ごめん。でな、おばあさんのとこ、また

気をして分かることがある』

遊びに行くって約束してしもた。おばあ

一同 (大笑い)

さん喜ばはったよ。おばあさんと知り合

「ほんまやなー！」

いになれたんも、自転車のおかげやな。

「おじいちゃん、ええこと言うな」

「ほんまや、ほんまや。よう書いてんな。」

さすがお父さんやな」

第六回「手のひらの二十二錠の薬」

*登場人物

敦子（二十歳）

母（敦子の母）

教会の先生（四十歳・男性）

医師（男性）



母 敦子、卒業おめでとう！ いよいよ美容

師さんのスタートね。

敦子 子どもの頃からの目標が達成しました！

お母さんの髪もカットしてあげるね。

母 当分は遠慮しとくわ。

敦子 えー…。

母 お店で、先輩の方たちのお仕事をよく見て、勉強するのよ。

(病院のノイズ)

敦子 はーい。将来自分のお店が持てたらいい

医師 鈴木敦子さんの病状は、うつ病。

なあ。

敦子 (びっくり) え？

母 今から何言ってるの？ フフ…、大きな夢。

医師 パニック障害、不安神経症、強迫神経症。
敦子 …はあ…？

敦子 私は店長や先輩に色々教えられ、バリバリと仕事をこなした。友人と旅行をしたり、遊んだり、充実した日々を過ごしていた。しかし…。

医師 頑張り過ぎていませんか。自律神経がおかしくなって、コントロールが効かなくなっただけでしょう。それに摂食障害もありますね。お薬を出しておきます。

敦子 二十四歳から私の人生は大きく変わって。全ての物を失った。

敦子 私は夢も希望も失った…。仕事を辞め、カウンセリングを受けたが良くなりません。残ったのは、手のひらの上の一日二十二

錠の薬だけだった。

母 (悲鳴) 敦子！ 何するの！ 止めて！

敦子 それからは、母に見付からないように、

リストカットをするようになった。

母 敦子、お母さんが行ってる金光教の教会

に、一緒にお参りしてみない？

敦子 嫌よ。あんなに頑張ったのに、こんなに

なるなんて。この世には、神様なんかい

ないのよ！

母 だから、だから…頑張り過ぎたからだっ

て、病院の先生もおっしゃったでしょ。

(考える間) じゃあ、教会の先生に電話

だけでもしてみない？

敦子 そんなの嫌。見ず知らずの人に！

敦子 母は、電車を乗り継いで教会に行き、私

のことをお祈りしてくる。そんなことで

この苦しみが治るのなら、楽なものだと

思った。

母が教会とか電話とか度々言うものだから、ついに私は面倒臭くなった。

「すればいいんですよ」

母は電話に飛びついた。私は言ったこと

を後悔した。

(ピツピツ、ダイヤル)

母 娘に代わります。

先生 (電話の向こう) リストカットしてるん

(電話を切る)

だって？

敦子 はい。

敦子

電話を切った後、あの先生は何か違うと

先生 悪いことじゃないけどなあ…。

思った。私のことを否定しなかった。私

敦子 えっ？

の味方でいてくれそうだ。

先生 あのね、そんなに自分を責めなくていい

怖いけど、行ける所まで行ってみよう

んだよ。

か？

敦子 は…はい。

先生 一度、ここに遊びに来ない？

(過ぎ去る電車のごう音。街のノイズ)

敦子 でも…私…怖くて、外に出られません。

人混みが怖いんです。パニックになりま

敦子

やっとの思いで教会にたどり着いた。こ

す。そんな遠い所。

こに来て何が変わるんだろう…、と思い

先生 そう、じゃあ来られるようになったら、

ながら中に入った。

いつでもおいで。

不思議だ、どこにいても息苦しかったの

に、ここでは楽に息が吸える…。

若い先生がニコニコして迎えて下さった。

先生 よくお参りに来られましたね。

敦子 私…お参りに来たわけじゃありません。

先生 はいはい。

敦子 ただ、どんな先生かって…。

先生 ハハ…。それはそれは…。じゃあ、お話を伺いましょうか。

を伺いましょうか。

敦子 …。

先生 嫌なら無理しなくたっていいんですよ。

敦子 私は、ポツリポツリと話し始めた。病気の

こと、どこにも持って行き場のない気

持ちのこと、死んでしまいたいこと。先生は私の一言一言に深くうなずいてくれた。ここには私の話をちゃんと聞いて、受け入れてくれる人がいる。私は知らぬ間に、本当の自分をさらけ出してしゃべっていた。それを温かく包んでくれる。

(繁華街の雑踏)

敦子 それから時々教会に行くようになった。

先生は、私の話を辛抱強く聞いて、共感してくれる。聞いてもらった後で、心の重荷が取れている。春の日だまりにいるような穏やかな感じ。そして、私の幸せを祈ってくれている。

先生 敦子さん、生かされているあなたの命そのものに価値があるんですよ。

敦子 それから数年経ち、私は、社会に一步踏み出そうと、勇気を出して、近く的美容院でアルバイトを始めた。

(穏やかにゆったりとした雰囲気のみ)

先生 そうですね。それは良かったですね。

敦子 先生の髪、カットさせて下さいね。

先生 (笑う) ハハハ…。ありがとう、ぜひ。

敦子 あ…でも、もうちょつと…私が上手になつてから。



第七回 「言葉はナイフより痛い」

*登場人物

大介（子供）

父（大介の父・教会の先生）

母（大介の母）

母 リフティングで何？

父 サッカーとラグビーの区別もつかん母さ

んに、説明してもなあ…。

母 もう、そんなら、早よ呼んできて。

（カラスの鳴く声。リフティングの音）

大介 九十五、九十六、九十七、九十八、九十

九、百…

父 お、大介、えらい続いているやないか。

大介 百一、百二…あー、新記録やー！

父 はは、そのスパイク気に入ったか？

大介 うん、友達がカツコええって。

母 もう、二人とも何してるの。呼んでるの

に。

母 大介、ご飯よー。

大介 …。

母 （呼ぶ）大介ー。

父 庭におるんや。

母 何してるの？ こんな夕方に。

父 リフティングの練習やろ。

大介 数、数えてたんや。返事したら分からん

ようになるやん。

父 私は金光教の教会の先生をしている。

ある日のことだ。大介が学校帰りに教会に
来た。ぼんやりと隅の方に座っている。

父 大介、どないした。

大介 …。

父 どないしたて、聞いてるんや。

大介 神様は僕のお願い聞いてくれはるやろ
か？

父 お前、今までお祈りもろくにしたことな
いのに…。お父ちゃんに言うてみ。

大介 転校して、部活に入ってきた子がおるね

ん。

父 うん。

大介 その子、前に住んでたところで、サッカー

のクラブチームに入っていて、ものすごう
まいんやけど、僕らがミスすると、「う
ざい」とか、「このどアホ」とか言うね
ん。

父 ああ、そらあかんなあ。皆黙ってるのか？

大介 言い返せるようなやつおらんし、言い返
せへんほどそいつは上手なんや。そやか
らサッカーやってもちつとも楽しいこ
とない。

父 楽しみながらやるのが一番やのになあ。

大介 うん、上級生は、「あいつはあんなやつ
やから、あんまり気にするな」て言うて

くれるけど、誰も何も言わへんし、どん
どん付け上がるんや。毎日走ってボール
蹴って、一生懸命に練習してんのに、レ
ギュラーにもなられへんし、僕、部活が
しんどくなってきた。

父 毎日やないか、もう二十分も入ってるで。

大介 どこか悪いんか？ 病院に行こか。
ほっといて！

父 その夜、大介に聞いた。

父 大介が可哀想や思うし、その子に対して

父 どうや、まだその子何か言うてくるん

も腹が立つ。しかしこういう経験も将来
役に立つかと、私は祈るだけやった。

大介 もうええやん。

夏休みに入った、部活は毎日ある。朝に

父 言葉はナイフやからなあ。

なると…。

大介 ナイフより痛いわ。「うつといねん」と

父 おい大介、いつまでトイレに入ってるん

か「死ね」なんか言われたら、自信なく
すし、そんでまたミスしてしまう。もう

や？

嫌や、辞めてしまいたい。

大介 お腹が痛いんや。

父 辞めたい割合は、どれくらいや？

大介 八割や、けど二割は続けたい。サッカー

(ひぐらしの鳴き声)

好きやから。

父 そうか…。

母 大介、おかえり。

大介 もし辞めたい言うても、監督は辞めさせ

大介 (深いため息) ハーツ！

てくれへんと思うわ。

父 どないした？

父 うん、分かった。もしお前が辞めとうな

大介 九対一や、九割辞めたい。

ったら、お父ちゃんが何としてでも辞め

父 明日、自分で判断してこい。もう辞めて

させたる。いつでも言うんやで。

もかまへんからな。

大介 うん。

大介 分かった。

父 大介の安心した顔を見て、「神様は大介

父 私は神様に「大介に、自分で続けるか辞

と一緒にになってこのつらい状況を支えて

めるか判断させます。本人はサッカーが

下さっている、守られて頑張っている」

大好きです。どうぞ続けることが出来ま

そう思った。

すように」とお願いした。

父 あいつ、どうするかなあ。

母 同じこと何遍も言わんといて。

父 お前かて、さつきから落ち着かんやないか。

(ドアを開ける音)

大介 お父ちゃーん。

父 お、大介どうやった？

大介 神様ってすごいなあ。

父 え？ どういうことや？

大介 監督がな、今まで頑張ったから、今日か

らお前はレギュラーやって。そんなん言われたら、辞めるなんて言われへんやん。

母 へえー、そうやったん、良かったなあ。

大介 秋に隣の学校との試合があるんやつて。

父 神様が私たちを包み込んで、「大丈夫。

この子はここを通過って成長しているんや、安心しなさい」と言われているのを感じた。

(ワアーワアー、歓声)

父 おい、見てみ、大介が…、ワアーやった

ー！

母 何をやったん？

父 大介がアシストして、一点入った！

母 アシストて何？

父 ああ、もうー、面倒臭いなー。

母 お父さん、大介がこっち向いて手振って

るよ。



第八回 「ありのままの自分」

*登場人物

あゆみ (二十歳)

母 (あゆみの母・四十五歳)

教会の先生 (五十歳くらい・女性)

祖父 (七十五歳くらい)

(電話のベル)

母 (電話の向こう) もしもし、あゆみ。

あゆみ あ、お母さん。

母 おじいちゃんが危篤なの。

あゆみ えっ！

母 急に倒れたのよ。帰れない？ おじい

ちゃん口には出さないけど、あゆみに
会いたがってると思う。

あゆみ うーん…、明日就職の面接なの。どう

しよう…。

母 じゃあ…ともかく…終わったらすぐに
来て。

あゆみ 私は面接が終わってから実家に駆け付

けた。と言っても電車で一時間半だ。

祖父の臨終に間に合わなかった。「お
じいちゃん、ごめんなさい…」。ゆう
べ来ようと思ったら来られたのに。

葬儀は金光教のお葬式だった。

あゆみ お母さん、金光教って？

母 おじいちゃんが信心していたの。

あゆみ へーえ、知らなかった。

あゆみ 祖父の葬儀は、教会の先生によって、

手厚く行われた。母より年上の女の先
生だったので、ちよつとびっくりした。

母 あゆみ、教会の先生のところにお礼に

行ってくれないかな。

あゆみ 教会？ 私が？ お母さん行ってよ。

母 私、パート休めなくて。

(パイパイ、鳥のさえずり)

あゆみ 私はクッキーを焼いて持って行った。

教会の中は静かで落ち着いていた。先生はクッキーを神様にお供えして…。

先生 お手製のクッキーなの？

あゆみ はい、私、製菓専門学校に行つて…

あ、お菓子の学校…。

先生 はい。

あゆみ パティシエになるのが夢なんです。

先生 まあ、それは良いわね。おじいさんも

あなたのことをいつも気にかけて、お祈りをしていらつしやいましたよ。

あゆみ (意外) おじいちゃんが？

祖父の声 あゆみはふびんな子なんですよ。娘

が離婚しましてね。私が父親代わりにならなきゃいけないのに、私は不器用で、ただ見守っているだけで。

あゆみ 私…親が離婚して名字が変わつてか

ら、小学校でいじめられました。参観日にネクタイ姿の友達のお父さんたちの中で、作業着姿の祖父がそつとのぞいていたのが、とても恥ずかしくて…。

今から思うと、工場の仕事を抜け出して来てくれたのだと思います。母は母で、いつも余裕がなくて働いていて。

だから私は家の人の顔色を伺って、いじめのことも言えなくて、ムリして明るくしてました。

先生 そう、つらかったのね、我慢したのね。

先生 そう…。

あゆみ はい、中学の中ごろから成績が上がっ

あゆみ 先生は、神様の方を向いて、深く静か

てきました。友達がいらないから、勉強するしかなかったんです。

に祈って下さった。

先生 頑張ったのね。

あゆみ すると、周りの目が違ってくるんです。

あゆみ やがて、私は第一志望のホテルに就職

「すごいんだね」って。

出来た。うれしかった。

先生 ええ。

夏休みに家に帰る途中、ふと、足が教

あゆみ それから私は、ありのままの自分な

会に向かった。

て価値がない、人に気に入られる、良

い評価をされる自分を演じるようにな

先生 よく来て下さったわね。

りました。

あゆみ はい。

先生 今でも…？

先生 その後、どう？

あゆみ 疲れています。今は自分の存在価値な

あゆみ (思いつく・独り言のように) あ…そ

んで分かりません。

う言えば、今日は私の誕生日でした。

先生 あら、おめでと…。

あゆみ (前にかぶせて) おめでとうなんて言

わないで! 私は生まれてこなければ

良かった!

先生 あゆみさん!

あゆみ 先生はいきなり私を抱き締めた。温か

かった。私は泣き出してしまった。

先生 何かあったの?

あゆみ (泣きじやくりながら) また…人の顔

色をうかがう自分が出てきて、せつか

く夢だった仕事に就けたのに。だから

…つらい…。

先生 …あのね…人に気に入られなくていい

のよ。あゆみさん、「何も期待されて

いない」と思うと気が楽でしょ。

あゆみ (つぶやく) 何も期待されていない…。

先生 本当は、あなたは頑張ってるんだから。

私は、ありのままのあなたが好きよ。

あゆみ 私は家に帰った。母が祖父の遺品を整

理していて。

母 あゆみ、おじいちゃんが大事にしてい

た古い箱の中から、あゆみの子ども

時の物が色々出てきたわよ。

あゆみ これ、小学校の時の作文や絵だわ。こ

んなおじいちゃんの顔、描いたかなあ

…。フフ…下手くそ。

母 描いたわよ。おじいちゃん喜んで壁に

貼った。隅にがびょうの穴があるで

しよ、忘れたの？

あゆみ これ、通信簿だ。

(パラパラめくって…)

あゆみ あれ。おじいちゃんの字で隅に何か書

いてある。

祖父の声 あゆみは無理をしていないか心配

だ。私はどうしてあげたら良いのだから。ただ祈るだけだ。

あゆみ 私は愛されていたのだと初めて実感し



第九回 「ひとりじゃない」

*登場人物

教会の先生（七十歳・女性）

理沙（中学生）

父（理沙の父）

（病院のノイズ）

理沙 おばあさんは…あ、ごめんなさい、えっ

と…。

先生 おばあさんでいいのよ。

理沙 いつもお見舞いに来る人が先生って言っ

てるけど、何を教えてる先生？

先生 学校の先生じゃないの。

理沙 え？

先生 金光教って教会の先生なの。

理沙 教会の？ だからいろんな人がお見舞い

に来るのね。

先生 そうよ、私はその人たちのお話を聞いて

いたの。

理沙 どんなこと？

先生 何でもいいの。その人が聞いて欲しいこ

と。

理沙 じゃあ、私の話も聞いてくれる？

先生 もちろんよ。ベッドのお隣さんなんだか

ら。

理沙 私ね、白血病なの。骨髄移植以外に治る

方法はないんだって。私死んでしまうのかしら？

(引き出しの開け閉め)

先生

大丈夫！ 治るためにこうして病院に入

院しているの。あきらめたら駄目。：理

沙ちゃんは、何年生？

先生

ねえ、この手鏡で外を見られるかしら。

鏡の角度を変えるから、見えたら言っ

理沙

中学三年生。高校受験で一生懸命勉強し

てたのに…。学校に行きたい、友達と遊

理沙

うん。

びたい。それなのに卒業式にも出られな

先生

どう？ こう？

い。私の人生はもう終わり。

理沙

：あつ。

先生

終わりじゃない！ 理沙ちゃん、病気に

先生

こうかしら？

勝つ、って強い気持ちを持つのが一番大

理沙

うん、車が走ってる、ビルとか、人が寒

事なのよ。

そうに歩いてるのが見える。

理沙

でも…今の私の世界は、この窓から見え

先生

そうよ、みんな生きてるの。理沙ちゃん

る四角い空だけ。動く物は雲だけ。

も生きてるのよ。希望を捨てないでね。

先生

ちよつと待っててね。

理沙

ねえ、あそこで光ってるの…。

先生 ん？ ああ、クリスマスイルミネーションよ。

父 いや、それほどひどくない。でもここに

理沙 もう…？

来られなくなった。これからはパパがなるべく会社の帰りに来るから、な。

先生 ええ、夜になったらもつと奇麗よ、また

理沙 うん…。

見ましようね。

理沙 うん、ありがとう。

先生 その夜、理沙ちゃんは泣いていた。私は、

先生 ふと、理沙ちゃんの枕を見てハツとした、

理沙ちゃんが助かりますように、助けて下さいと、お祈りした。

髪の毛が抜け落ちている。そつとくず籠に捨てた。鏡は…引き出しにしまう。

(公衆電話をかける)

父 理沙、遅くなってゴメンな。実はね、マ

先生 あ、もしもし私。あのね、お見舞いの人

マが自転車とぶつかって、転んで、足の骨を折って。

断ってちょうだい。あ、それとピンクの毛糸と編み針買ってきてね。

理沙 え！ 入院したの？

先生 ある朝のことだ。

先生 (読む)

理沙 おばあさん！

「理沙、早く元気になって、また一緒に遊ぼうね。由香」

先生 どうしたの？

「理沙ちゃんのお休みの間のノート、私

理沙 ゆうべ夜遅くパパが来たの。それでね、

のを見せてあげるから。琴子」

いい知らせが二つあったの！

わあー、他にもぎつしり書いてあるわね

先生 何？

！。

理沙 一つはね、骨髄の適合者が見つかって、

理沙 うん。私：私：一人ぼっちじゃなかった

移植を受けられるって。

のね。

先生 良かったわね！

先生 そうよ、いろんな人に支えられてるのよ。

理沙 うん。

骨髄を下さる方もそう。

先生 もう一つは？

理沙 私は、新しい命をもらうのね。

理沙 あのね、クラスの友達に寄せ書き。

先生 見せてもらっていい？

先生 理沙ちゃんがあまりに可愛くて、リンゴ

理沙 いいわよ……うーんと……これ。

のような頬つぺたをつついた。

ねえ、これは私からのクリスマスプレゼント。
ント。

理沙
わあー、ピンクの帽子可愛い…。ありがとう！



先生 やがて私は退院した。理沙ちゃんのお見

舞いに毎日行った。しかし、理沙ちゃん
の治療が進むにつれて、だんだん会えな
くなった。

私は理沙ちゃんのことをひたすら祈りな
がらも、日々は過ぎて行った。

先生 五年ほど経ったある日。

理沙 ごめん下さい。おばあさん、私のこと分
かる？

先生 まあ、理沙ちゃん!? すっかり元気にな
って!

理沙 今日、私の成人式なんです。

先生 おめでとう! 本当におめでとう!!

理沙

あのね、昨日友達から、中学の教室に来てくれて言われたの。行ったら、教室に卒業式の飾りつけがしてあって、先生や友達が揃ってて、私に卒業式のプレゼントしてくれたの。

先生

まあー！

理沙

これ、その時の写真です。おばあさんにぜひ見てもらいたくて。



金光教本部 ラジオ放送係

【住所】 719-0111

岡山県浅口市金光町大谷320

【電話】 0865-42-6453

【FAX】 0865-42-2114

【メール】 w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

北海道放送	(土)	午前5時10分	山陽放送	(日)	午前6時35分
東北放送	(日)	5時00分	中国放送	(土)	5時50分
ニッポン放送	(日)	4時30分	南海放送	(日)	6時00分
東海ラジオ放送	(金)	5時25分	RKB毎日放送	(日)	6時50分
和歌山放送	(日)	6時50分	宮崎放送	(日)	7時10分
朝日放送	(水)	4時50分			

こころで聴くおはなし

<http://www.konkokyo.or.jp/radio/>